

林和清著

『塚本邦雄の百首』

(ふらんす堂)

著者の文体がクセつよなもの、背景情報や他作品の引用が豊富でとても手厚い。作品に紐づいた客観的な説明に、師事した日々の思い出を交え、主観が押し込まれてくる。非常にゴリゴリした歯ごたえのある一冊だった。

現代の目で見ると、塚本の作品は随分と古く、遠いものに見える。たとえば戦争が絡む作品を、私はリアリティと結びつけて鑑賞することができない。だからといって、断絶してしまうわけでもない。その理由の一つが、著者も述べている具体性の恩恵ではないかと思う。

花の若狭知らず青葉の加賀も見ずわれに愕然として老  
い来る  
気色ばんで向きなほれども春の夜のゴンチャロフとは

鉛の名なりし

地名にも商品名にも、確たる手ざわりがある。人名を詠んだ作品も多い。固有名詞を介することで、クリアに浮かび上がる作品群。その輪郭をなぞっていくと、今なお褪せない塚本のまなざしに貫かれる。「塚本邦雄というひとりの人物が存在し、試行錯誤の果てに苦しんで世に問う作品」という著者の言葉が腹に落ちた。

時代の隔たりなど軽々と飛び越えて、読者の感性を突き刺してくる歌の圧。それを浴びながら読み進め、いつのまにかずぶ濡れになっているのが心地よい。(黒田亜希)

三瀧忠典歌集

『曲がらなければ伊勢まで行ける』

(現代短歌社)

主体はおそらく奈良県の橿原市役所に勤めていて、職場での歌が多くを占めている。助詞やフレーズの負荷を調整し、読み進めることに負担ががからないように意識されているように感じた。不気味なまでの詩性のフラットさはこの歌集の魅力になっている。

スリッパにデスクの下で履き替えて苦情を聞いた足を休める

座るときに膝がぶつかる窓口に斜めに座り要件を聞く  
窓口に出るとき靴と自席に在るときスリッパを履き  
替えること、膝がぶつからないように斜めに座ること、どちらもとても些細な行為であるけれど、働くなかで意識せずとも行うことを改めて意識しなおした歌。その行為の持つ小さな意味が歌集全体で見たときに重なって椅子に座る主体の存在の輪郭が鮮明になる。

紙コップに紙くずを入れたそのときに紙コップも紙くずになった

気付きの歌。水をまた入れれば利用できる紙コップに紙くずを入れてどちらも紙くずにしてしまう。情景の描き方がなめらかで単体では感じられないものが歌のまとまりになるときに滲んでくる。詩的な起伏を抑制するような生活実感の記述の一つ一つは薄い線であつても何度も描くことであらわれるその質感にポエジーがある。(松下誠一)